

# 当事者と地域で響き合う

## べてる・向谷地氏が講演 21世紀キリスト教社会福祉実践会議第10回記念大会



活発な議論が交わされた

21世紀キリスト教社会福祉実践会議(会長・幸田和生)日本カトリック司教協議会力リタスジャパン(担当司教)が2月11日、救世軍杉並小隊(東京・杉並)で第10回記念大会を開催。「いのち響

きあう出会い」をつなぐ。の中に生かされる私たち」をテーマに、社会福祉法人「浦河べてるの家」(北海道・浦河町)の運営に携わる向谷地生良さん(北海道医療大学教授)と同メンバー3人による講演「弱さをきずな」へてくるの歩みと当事者研究」のほか、参加者が少人数のグループに分かれて、主催者、講演者をまじえた問題意識の共有や質疑応答がなされ、153人が参加した。

【中田有紀

21世紀キリスト教社会福祉実践会議は1998年、キリスト教主義の社会福祉関連団体が超党派で協働し、福祉の現状と課題を分かち合い、キリスト者が社会福祉に携わる意義を深め、共に歩むこと等を旨とし、社会福祉法人救世軍社会事業団、社会福祉法人キリスト教ミッド社会館、カリタスジャパン、日本キリスト教児童福祉連盟、日本キリスト教社会事業同盟、日本キリスト教社会

福祉学会、日本キリスト教保育所同盟、日本聖公会社会福祉連盟、日本バプテリスト社会福祉事業団連絡協議会、ルーテル福祉協会の10団体が参加して発足。毎年各団体代表者会で情報交換を重ねるほか、2年毎に相互啓発や研修を目的として、信仰や立場を問わず誰でも参加できる大会を企画、運営してきた。

「浦河べてるの家」では精神障害等を抱えた当事者たちが共同生活しながら、メンバーとの交

流を通して、自分の症状との向き合い方を考える「当事者研究」を行っている。79年に日本基督教団浦河伝道所で共同生活を始め、84年から社会福祉法人「浦河べてるの家」として活動し、日高昆布をはじめ地域の特産品の販売で起業、地域の精神障害者らの活動拠点でもある。

講演ではメンバーが当事者研究の成果として、ほめられたことを日記に書きつけてマイナスの幻聴をプラスの幻聴に変える「幻聴さん性格改造法」や、「食事に薬が入っているような気がする」体感幻覚を、メンバーや料理をする人との「コミュニ

ケーションで研究する日常を紹介。向谷地さんは「病気と言われる症状は、周りとのコミュニケーションを取り込んでいく。私たちが当事者の実感を否定していたら、幻聴はつらい性格が変わってしまう。当事者とながつている私たちに、症状の一部を作っている責任がある」と語って、「幻聴の内容は社会や文化に影響される」とする米・スタンフォード大学の比較研究を併せて紹介した。

また「べてるの家」37年間の活動を通して、浦河町では昨年、精神科入院が実質ゼロになり、120人の精神障害等を抱えた

当事者が地域で暮らしていることに触れ、「この間に、人口は4割減少したのに、教会出席者は6倍になった。企業は撤退したのに、浦河で最も弱い立場の、統合失調症の人たちが始めた事業は、どんどん伸びて、経済的にも大きな力になっていく。地域の苦勞が教会の苦勞になる。そこに新しい教会づくりが始まる」とを学ばせられている」と教会の可能性に言及した。

講演後は参加者による交流が行われ、「障害を明くる語るところに、つながるヒントがあるのではないか」「自分が今一番困っていることを語る

当事者研究は、健常者にも必要」などの感想が寄せられた。

最後に実践会議事務局の市川一宏さん(日本キリスト教社会福祉学会会長)は、昨年11月東京都から共助型社会の提言書が出されたことに触れ、「助けられていると思ったら、助けられているという相互の関係を理解することとそれ自体が共助。私も当事者だと実感している。あなたを愛している」と言い続けている神様の愛が、その人を通して輝いていることを理解できているかという自分自身への問いがあつて初めて、ともに歩んでいくことができる」と結んだ。